



静岡県・私立
加藤学園暁秀高校・中学校

進学実績向上

個に応じた指導と 基礎・基本の定着を徹底し 学校全体の底上げを図る

◎1926年創立の沼津淑徳女学院を母体とする。「至誠・創造・奉仕」を校訓として、人間教育、大学進学教育、国際理解教育を柱とした教育を展開。2002年にはバイリンガルクラスが国際バカロレア機構からインターナショナル・バカロレア・プログラムの認可を受けた。

設立	1983(昭和58)年
形態	全日制／普通科／共学
生徒数	1学年約180人
12年度入試合格実績(現浪計)	<p>国立大は、北海道大、東北大、東京大、浜松医科大、名古屋大、大阪大、神戸大、九州大、静岡県立大などに54人が合格。私立大は、青山学院大、慶應義塾大、国際基督教大、上智大、法政大、明治大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西学院大などに延べ465人が合格。</p>
住所	〒410-0011 静岡県沼津市岡宮字中見代1361-1
電話	055-924-1900
Web Site	http://www.katoh-net.ac.jp/GyoshuHS/

変革のステップ

背景

◎中学校で優秀な生徒が内部進学せず、公立進学校へ進むなどの影響により、難関大の合格実績が安定しなかった

実践

◎東京大志望者専門の講座、模試の復習、朝学習による基礎・基本の定着で、全学力層の学力向上を図る

成果

◎7年連続で東京大合格者が出る。国立大や難関私立大の合格者数増加が生徒や教師の自信につながる

中学校の成績上位層が 高校進学時に公立進学校へ流出

静岡県沼津市に位置する加藤学園暁秀高校・中学校が、指導改革に着手したのは7年前。同校は難関大や医学部の合格者を年々増やしてきたが、それは教師個々の努力による手厚い指導に負うところが大きく、東京大合格者は4年に1人出る程度で実績は安定していなかった。中学校で成績上位の生徒が高校に内部進学せず、公立の進学校に進むこともあった。進路指導部長も務める岩崎巳貴男(いわさきみきお)教頭はこう話す。

「公立の上位校と比べて、本校の進学実績に物足りなさを感じる保護者がいたのだと思います。高い志望を掲げる生徒の意欲に応えるためには、毎年東京大の合格者が出るような指導が求められており、その実現には、教師個人の力に頼るのではなく、組織的に指導する体制が必要でした」

東京大志望者の指導は、学級担任が教科担任と連携して特別補習を行う形で進めていたため、学級担任の精神的な負担が大きかった。進路指導部の大場潤先生は次のように振り返る。

「学級担任が模試の結果を見て、東京大が狙えると思う生徒を見付け、弱点となる教科の担任に補習をお願いして学力を伸ばしてもらおうという方法で、東京大合格者を出していました。組織的な指導ではなかったため、弱

点科目を克服できず、科目によって実力の伸びに差が見られることもありました」

東京大対策担当の教師によって 学習・精神の両面で生徒を指導

転機は7年前に訪れた。岩崎教頭の提案によ



加藤学園暁秀高校・中学校教頭
岩崎 巳貴男 いわざき みきお

教頭3年目。進路指導部長。「授業開始は5分前行動、終了はチャイムと同時に心掛けている」



加藤学園暁秀高校・中学校教頭
鈴木美和子 すずき みわこ

教頭2年目。「授業で生徒に理解させることに全力を注ぐ」



加藤学園暁秀高校・中学校
井堀 賢 いほり けん

教職歴19年。同校に赴任して16年目。3学年担任、進路指導部副部長。「自分自身が向上心を持って学び続ける」



加藤学園暁秀高校・中学校
大場 潤 おおば じゅん

教職歴・同校赴任歴共に24年。1学年担任、進路指導部。「授業がまず大切。面談では、生徒のことを思って話せば、思いは必ず伝わる」



加藤学園暁秀高校・中学校
市川 成美 いちかわ しげあき

教職歴・同校赴任歴共に21年。1学年担任、進路指導部。「生徒一人ひとりと真摯に向き合い、自らの人生を切り開く力を身に付けさせたい」

り、東京大対策担当の教師を5教科で選抜し、個別指導を行ったところ、生徒の力がぐんぐん伸び、東京大合格を果たした。教師たちは組織力の大切さを改めて実感し、この方法を定着させれば安定した実績を上げられるのではないかという自信を得た。以降、毎年改善をしながら、東京大対策担当の教師による組織的な指導を継続している。その流れは次の通りだ。

2年生の3学期に、進路指導部と学年団が模試の成績などを基に東京大を目指せそうな生徒に声を掛け、本人と保護者の意思を確認した上で、3月中に東京大志望者を決定。それを踏まえて、進路指導部が学年を問わず中高の全教師の中から東京大対策に当たる教師として、国語・数学・英語は各2人、理科（地学を除く）・地歴・公民は各科目1人、計十数人を選抜する。

そして、3年生の4月に放課後講習が始まる。元々、3年生は全員が放課後に講習を受けており、東京大講習もその一環だ。1日1教科ずつ、1週間に5教科を実施し、数学と英語は連続2コマ行うこともある。これを年末まで続け、セミナー試験後は個別指導に切り替える。

受験勉強を乗り切るには、生徒の精神面のケアも欠かせない。東京大講習の担当教師は、模試の結果が出る度に「スタッフ会議」を開く。「8月までにC判定に上げたい」「英語はよいが、数学が弱いので伸ばしてほしい」など、成績にかかわる情報の他、生活状況や精神面の様子も

共有する。英語担当の鈴木美和子教頭は、精神面の支援の大切さを次のように説く。

「入試が近づくにつれて、生徒の意欲はどんどん高まっていますので、あえて教師が課題を出す必要はありません。必要なのは精神面の支援です。この時期、生徒は自分で課題を見付けて頻繁に質問に来ますが、それは不安の裏返しでもあります。勉強すればするほど、自分の足りない部分が見えてくるので不安に駆られるのです。そうした時はあまり難しいことは言わずに、基礎の見直しを促したり、『このままで大丈夫』と言って安心させたりします」

スタッフ会議によって、生徒の精神面の情報も共有できるようになり、声掛けや課題量の調整などがしやすくなった。教師が与えるだけでなく、励まし支えることが、生徒にとって何よりも心強い受験指導となるのだろう。

先輩の実績が後輩に 受験に立ち向かう勇気を与える

東京大合格者を増やすためには、その前に東京大を目指そうと思う生徒を増やす必要がある。そのための取り組みの1つが「東大見学」だ。2年生の夏休みに希望者を募って東京大を訪れ、卒業生の現役東大生に学内を案内してもらおう。東京大を間近に見て、先輩から直接、大

学生生活や受験の体験を聞く中で、生徒は先輩を誇らしく思い、大学生活への憧れを強めていく。

正しい情報提供も欠かせない。毎年4月に開く「東大講座」では、3年生の東京大志望者と2年生の希望者を対象に、学校の指導体制を伝えると共に、東京大合格のための心得として、入試における1点の重みを伝え、基礎の重要性を説き、受験に向けて気持ちを引き締めさせる。進路指導部副部長の井堀賢先生は次のように述べる。

「東京大への思いはあっても、正確な情報を知らないために諦めてしまう生徒もいます。東京大の入学定員は100人くらいだと思います。自分はとても合格できないと思いついていた生徒もいました。東京大は単に難易度が高いのではなく、設備が充実し、奨学金も手厚いことを伝えると、それを励みに頑張る生徒もいます。正しい情報を届け、生徒の志望や決意を具体化させることが、受験に向かう力になっていきます」

一連の対策の結果、改革を始めた05年度から連続7年間で東京大合格者が出た。今では、1年次から東京大を目標に据える生徒も増えている。1学年担任の市川成美先生はいう。

「改革を始めた当初は、教師の方から東京大志望へ誘導することがありましたが、11年度の卒業生には1年次から自ら東京大を志望する生徒が何人かいました。中学校時代から

毎年先輩が東京大に合格するのを見て、東京大を身近に感じ、「自分にも出来る」と自信を深めているのだと思います」

「個別大学対策講習」で個に応じた指導を徹底

学校の取り組みは、成績最上位層向けだけではなく、中・下位層を含めた、あらゆる学力層に対して実践されている。

その1つが、希望者を対象に、国公私立を問わず志望大に応じた個別指導を行う「個別大学対策講習」だ。特徴は、生徒自らが指導を受ける教師を指名する点で、例えば、国語、世界史、英語が受験科目の生徒は、該当する教師をそれぞれ1人ずつ指名し、指導を受ける。指名できるのは、3年生担当に限らず、中学校も含めた全教師だ。例年、センター試験受験者の9割に当たる100人強が個別大学対策講習を申し込む。

指導の内容は教師に任されている。生徒個々に添削指導をする教師もいれば、複数の生徒を集めて講義形式で過去問の解説を行う教師もいる。いずれにせよ、教師は複数の大学・学部を受験指導を同時に行うため、入試に関する幅広い知識と指導力が求められる。

「個別大学対策講習の期間は、私たち教師にも猛勉強が求められます。指名をしてくれ

た生徒の志望校の入試問題を解いたり、出題の傾向を調べたり、更には小論文の添削や模擬面接も行います。生徒を指導する一方で、実は教師自身のスキルアップに結び付けていることを実感します」（大場先生）

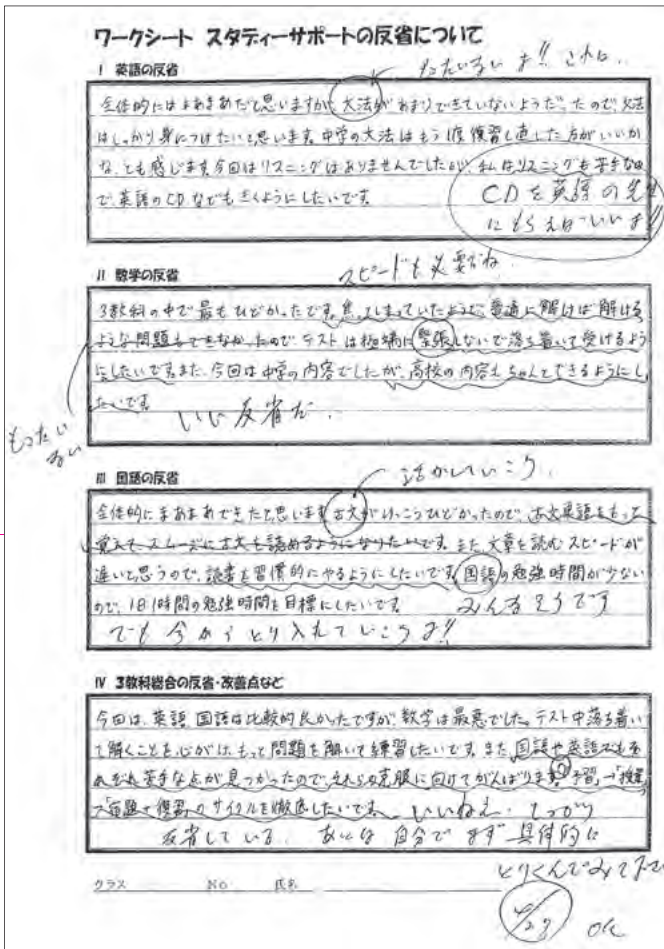
入試本番を控え、生徒が勉強している仲間の姿に刺激を受け、互いに切磋琢磨する雰囲気が生まれるのも、この講習のメリッットの1つだ。

「この時期の生徒は皆、不安と焦りを抱えています。だからこそ、学校に来て、友だちが頑張っている姿を見たり、教師に励まされたりすることが大切なのです。前期日程で不合格だった生徒は、家庭学習では気持ちの切り替えが難しかったと思いますが、学校で受けた周囲の励ましによって、それを乗り越えることが出来たのではないのでしょうか」（市川先生）

模試の解き直しと朝学習で中・下位層の学力向上を図る

日々の授業や補習を通して基礎・基本の徹底を図っているのも、同校の大きな特徴である。

中でも重視するのがテストの解き直しだ。定期考査と模試で間違えた問題は全て、「模試直しノート」にもう一度解いて提出する。間違えた問題をまとめてノートに残しておけば、苦手分野の把握や振り返りに役に立つ。更に、ノ



進研模試やスタディーサポート、定期考査は実施後に解き直しをさせるだけでなく、どこが良くどこが悪かったのかを記述させる。言語化によって課題を明確にし、次の試験に向けたステップにするのが狙い
*学校資料をそのまま掲載

1トの冊数が増えていけば、自分の努力が目に見える形で分かり、自信にもつながる。
また、10年前から全校で実施している10分間の朝学習も、基礎・基本の定着には有効だ。1時限目の冒頭から授業に集中して取り組めるよう、朝礼前の10分間を学習の時間としたのが始まりだ。内容は学年によって異なるが、多くが基礎・基本事項の定着を確認するプリントだ。例えば、1年生では国語、数学、英語をローテーションで取り組む。内容は成績中・下位層に焦点を絞り、国語は漢字や古典文法、数学は計算問題、英語は英単語や文法などの定着度を確

認するもので、各教科で作成する。添削は、解答を配って生徒自身に行わせる場合もあれば、回収して学級担任が入念にチェックする場合もある。市川先生は後者である。
「本当に進みたい大学が決まった時、学力が足りなくて諦めなくてはいけないという思いはさせたくありません。大学の選択肢を広げておくためには、低学年時に基礎・基本を固めておく必要があります。毎朝の課題を負擔に感じる生徒もいると思いますが、今が頑張り時だから確実に基礎・基本を身に付けようと言って励ましています」

生徒の主体性をいかに高めるかが今後の課題

改革の成果は、着実に進学実績に表れている。東京大の合格者が毎年出るようになっただけでなく、個別大学対策講習や朝学習などで全体の底上げを図った結果、国公立大や医学部、難関私立大の合格者も確実に増加している。

「以前は、難関大については、成績上位層だけが頑張ればよいという意識の先生方もいました。今は特定のクラスからだけでなく、複数のクラスから東京大を始めとする難関大の合格者が出ており、先生方の間にも自信が芽生えています。今後はこの結果を更に進化させるために、公立の進学校に匹敵する実績を上げ、学校としてもう1ランク上を目指していきたいと思います」(岩崎教頭)

一方、課題と感じているのは、生徒の主体性の向上である。

「本来ならば、『東大講座』や『個別大学対策講習』などで教師が手厚く指導しなくても、生徒が進路実現に向けて自ら努力する力を育てることが必要です。生徒の自主独立の心構えをどのように養っていくか。特に、成績中・下位層を中心に指導を検討しなければならないと考えています」(鈴木教頭)

更なる飛躍を遂げるための同校の改革は、これからが本番だ。